

LH氏より寄せられた質問は、名前は頭文字にし、文章を整え、質問別に番号を付しました。

この間のメールの問い合わせに答えていただいた中国××大学のLHです。国際日本文化研究センターの鈴木先生のHPに掲載されている「H・Rヤウス『挑発としての文学史』について」を拝読したのですが、いくつか分からない点が在りますので、お答えいただければと思います。

### 〔質問〕1

先ず、3頁目、上から二行目に前田愛氏の名前が出ており、8頁には「すでに構造主義はもちろん、記号論美学も竹内敏雄訳シリーズ…」とあり、20頁にも「構造主義言語学」とあります。要するに「構造主義」についてなのですが、私が今、使っている教科書に前田愛氏の「言葉と身体」という論文があり、そこに次のような記述があります。

「言い表すべき言葉を見出せないでいるもどかしさにたえている時、或いは、沈黙の中に自分を閉ざしている時、日常的な生活では見えていなかったもう一つの言葉の姿がたち現れてくる。言葉とは言葉だけで切り離せるもの、道具のように自由自在に使いこなせるものでなく、私たちの身体、ひいては私たちを取り巻いている世界の事物総体のなかに深く根を下ろしている何かであることがおぼろげながら、のみこめてくる」、また、「構造主義の言語観によれば、言語体系は厳然として存在し、人間の文化現象一般はそれによって形作られるとする。筆者はそのような考え方を日常生活における言語活動においては認めているものの、それを支えている根源的な人間と言語との関係について論を展開しているのである」とあります。

分からぬ点というのは、構造主義言語学によれば、言語体系と人間の文化現象との関係はどのような関係なのか、知りたいのです。

### 〔質問〕2

次に、4頁目に「文学史」をめぐって、「国民文化の形成期に開花した民族の形成過程を示す「国民文学の歴史」の役割を終えているためです。それにかわって、現在盛

んに、文芸学上の厳密な規定を前提とする問題史ないしは…」とありますが、この「問題史」を、どう捕らえたらいいのか。

〔質問〕3.

そして6頁目に「この敗戦コンプレックスの基たるものが、ヨーロッパ近代文化からひとつの要素やパターンを抽出して、それを基準に日本の遅れや歪みを裁断する「近代主義」とありますが、具体的に、たとえば、敗戦の知識人がそういった言論活動をしてきたという例を知りたいのです。

〔質問〕4.

同じ頁に「日本では、いわば井原西鶴以来、そのような時代が続いてきたわけですから」とありますが、「そのような時代」というのは、そのすぐ上にある「受容者傾向は絶えず意識にあがっており、直接生産者たる作家もそれとは無縁ではありません」という風に取り得るのですが、では、「受容者傾向」というのはどういうことでしょうか。「作者・作品・読者」のトライアードと、どのように関連するのでしょうか。

〔質問〕5.

9頁に「その際に時枝誠記の言語過程説を手がかりとしつつ、自己表出性の概念を創出し、その強度をもって美の基準としたものです」とありますが、ヒントとなるものを少し教えていただければと思います。

以下、順にお答えしてゆきます。

〔回答〕 1 前田愛流の「構造主義言語観」について

わたしは、前田愛氏の「言葉と身体」なる論文を読んでいませんし、また、この質問に答えるために、それを読む気にもなりません。これを教科書に使うのは、「反面教師」にするためでしょうか。

① まず、ここに書かれていることは、あくまでも前田氏の個人的考えです。「言い表すべき言葉を見出せないでいるもどかしさにたえている時、或いは、沈黙の中に自分を閉ざしている時、日常的な生活では見えていなかったもう一つの言葉の姿がたち現れてくる」ということに、あなたは納得できますか。

「もう一つの言葉」と前田氏が呼んでいるものは、「未だ言葉として表現できない心の動き」のことではないですか。なぜ、それを「もう一つの言葉」と呼ぶのでしょうか。そして、前田氏のいう「もう一つの言葉」とは、いったい何でしょうか。

「構造主義の言語観によれば、言語体系は厳然として存在し、人間の文化現象一般はそれによって形作られるとする。筆者はそのような考え方を日常生活における言語活動においては認めているものの」とありますから、前田氏は、ふつうの「構造主義言語観」とは、ちがうことを考えようとしているのです。

ですから、いくら、これを読んで、考えても、「構造主義言語学」にいう「言語体系と人間の文化現象との関係」が、わかるはずがありません。

「私たちの身体、ひいては私たちを取り巻いている世界の事物総体のなかに深く根を下ろしている何か」とは、「神の意志」や「宇宙の意志」のようなものを想定するしかない、私には思えるのですが。前田氏は唯物論者ですから、「宇宙を貫く物理的な法則性」のようなものなのでしょうか。それとも史的唯物論のようなものなのでしょうか。

② 構造主義言語学は、ジュネーヴ大学のフェルディナン・ド・ソシュール(1857-1913)が、従来、言語の系統を研究していた言語学(ある言語が、どの系統に属し、いつ、どのようにして出来たか、を研究する学問、たとえば、この言語は、インド-ヨーロッパ語族に属している判定し、それが、いつ、その流れの中から枝分かれして、ひとつの言語になったかなどの問題に答える研究)に対して、言語の体系(システム)を考える学問をつくろうとしたことに始まります。

われわれが話したり、聞いたりする活動(language、言語活動)が成り立つのは、言い換えると、話し手の言いたいことが相手に伝わるのは、なぜか、と考え、話し手が、たと

えば”dog”と言ったときに、聞き手が「犬」のことだと、その意味がわかるのは、「言語のシステム」を共有しているからだ、そのシステムを言語(langue)と呼ぼうと提案したのです。

たとえば「犬」は、英語では「dog(:)g, dag」、日本語では「イヌ」と発音しますが、どちらも同じものを意味するので、発音と意味は、本来、何の関係もない。その結びつきは習慣で決っているわけです。

その個々の発音と意味とが結びついたものが「記号」です。そして、その記号は単独で存在するものではありません。「犬」は「動物」の一種で、「猫」でも「鳥」でもないもので、「ブルドッグ」や「チワワ」や「プードル」などの総称です。

その発音と意味を結びつける習慣化した記号の体系があるからこそ、同一言語内で話が通じる。そういう関係をもつ記号の全体のしくみを「体系」といい、それこそが「言語」の本体だとソシュールはいったのです。

ソシュールは、大学の講義(彼は、生前一冊も本を書いていません)で、それを各人が共通して頭脳の中にもっている辞書にたとえています。

しかし、もし、それが各人の頭脳の中に「厳然として存在」するとすれば、言葉の意味の変化は起こりえないことになるでしょう。これでは、言葉に歴史があることを説明できません。実際の言語活動では、個々のケースで、意味にズレが生じたり、誤解がおこったりします。これらのことも説明できません。

そこでソシュールは、言語学の研究対象として、記号のシステムとしての「言語」を据え、言語活動は当面の対象としないことにしたのです。これが構造主義言語論の根本的な性格です。

前田愛氏が「筆者はそのような考え方(構造主義言語論のこと)を日常生活における言語活動においては認めている」というのは、このソシュールの考え方から言えば、

「言語」と「言語活動」とを同一視していることとなります。つまり、構造主義言語論がまるでわかっていないのです。

次に、このような意味での「言語」と文化現象との関係ですが、ここで前田愛氏が指しているのは、文化事象を記号の体系として読みとろうとする記号論(semiotics)一般を指しているようです。

ヨーロッパの場合には、キリスト教文化を背景にして、文化を象徴体系として考える考え方が様ざまに展開しました。

アメリカで言語活動の対象化に向けた記号論では、モリス(Charles William Morris, 1901-1979)が、言語運用論(pragmatics)、意味論(semantics)、構文論(syntax)の三分野に分けることを提案しました。この場合、言語運用論は、記号とその使用者との関係の研究です。

なお、鈴木貞美『生命観の探究』では、生命観との関係で、ディルタイの解釈学、カッシーラーの文化象徴論などにふれています。

また、構文論(syntax)から普遍文法論を展開したノーマ・チョムスキーの理論は、コンピュータ・プログラムとのアナロジーによる倒錯であるという批判を展開しています。

これは脳の生理学の問題です。言語は記号一般の特殊な形態で、人間には記号を運用しうる生理的な潜在能力があると認めることはできると思いますが、ひとつの言語体系は、あくまでも特定集団の習慣によって成り立つもので、したがって絶えず編み変えられているものです。

「普遍文法」のようなものを想定しうるとするなら、それらを抽象化して得られるものでしょう。ですから、「普遍文法」のようなもの運用しうる能力が生得的に脳に存在すると考えることはできないでしょう。

「言語」とは、あくまで、その習慣を学習することによって獲得されるものです。犬を指して「猫がいる」と言った子供は、周囲の反応を見て、そのマチガイに気づくというような

ことの繰り返しによって。

そして、「人間の文化現象一般」を「言語体系によって形作られるとする」のは、まるで「言語体系」なるものを「世界の創造主」に祭りあげるような理論といえましょう。

〔回答〕2、

ここでは、「国民性」以外の文芸学上の個々のテーマを立てて、その歴史的変化を研究することを言っています。

〔回答〕3.

これは、わたしが若いときからとりくんできた問題で、わたしの論考のあちこちに顔を出しているはずのものです。第2次大戦後の「近代化主義」の戦略に立つ思考全般を指しています。『生命観の探究』の第2次世界大戦後のところでも、かなりの分量をそれに割いています。

なお、今年12月20日に刊行される平凡社新書『戦後思想は日本をとらえそこねてきた—近現代思想史再考』の第1章では、大江健三郎「あいまいな日本の私」、吉本隆明『抒情の論理』、丸山真男「日本の思想」を、第2章では、丸山真男の歴史意識をかなりわかりやすく検討しています。

それを読んでくだされば、概要を理解していただけると思います。また、中村光夫の近代小説論については、戦中、戦後の連続性を考察しています。

〔回答〕4

「受容者の傾向」とは、自分の作品を読む人びとが、どんなものを求めているか、のことです。元禄期であれば、骨肉の情、恋愛の情など人情を重視する傾向が強く、これが当時「もののあはれ」と呼ばれていました。西鶴、近松らは、それを意識し、また、その意識を助長する作品を書いたということです。

これは中国、明末清初の気風とも関係しますが、これについて手っとり早く知りたければ、中公新書『日本人の生命観』に解説したと思います。

そして、このようなことと「作者・作品・読者」のトリアーデとの関係は、分析対象と分析方法の関係です。このようなことは「作者・作品・読者」のトリアーデを分析する方法によって、明らかになる、ということです。

〔回答〕5.

ヒントは、この論文の最初の方に書いてあります。時枝誠記『国語学原論』(1941)、三浦つとむ『日本語はどういう言語か』(1956)『認識と言語の理論』(1976)、吉本隆明『言語にとって美とは何か』を読んでください。

わたしが昔、それらについて批判したものとしては「文芸表現論の方へ」という論文があることも、『日本研究』第2集(1990年9月)に掲載されています。なお、『日本研究』のバックナンバーは、日文研のHPから読めるはずです。

以上です。さらなる質問があればご遠慮なくお寄せください。